

COVID-19 パンデミックを契機とする医学的無益性概念の再考

中澤 栄輔（東京大学）

COVID-19 パンデミックでは人工呼吸器の不足が懸念されたり、保健所による入院調整が難航して自宅待機を強いられた患者が出現するなど、医療崩壊とも呼べる現象が起きてしまいました。医療資源の不足は、災害時のトリアージに類した治療の選別に関する議論を引き起こし、一部のグループからは治療中止に関するガイドラインも提示されました。このガイドラインの骨子は感染症におけるアドバンス・ケア・プランニングの推奨でした。「行われている治療が医学的に意味のない医療行為となること」を指す医学的無益性という概念はこうした治療中止を巡る議論において中心的な役割を果たします。この概念を中心に、アドバンス・ケア・プランニングや医師による事前指示（POLST）が構築されています。しかし、医学的無益性という概念はエビデンスの程度、患者の価値観への配慮の有無など、かなり幅広くぶれの大きい概念であり、また、がんなどの慢性疾患の領域で発展してきた概念だけに、そのままの仕方で COVID-19 の治療の意思決定に持ち込んで良いのかは疑問です。今回の発表では、COVID-19 治療における医学的無益性概念を再考することで、救急医療における医療資源配分と治療に関する意思決定という医療倫理的に未整備と考えられる問題について考察させていただきたいと思います。